

I 港町の発展と北前船

1 港町尾道・瀬戸田・棕浦

○尾道

尾道が港としての役割を担うようになったのは、嘉応元年（1169）に大田庄の倉敷地に指定されたことがきっかけでした。当時は、世羅郡を中心とした大田庄という荘園がありましたが、ここで徴収された年貢を船で積み出す場所がありませんでした。そこで、大田庄に近く、地形が入り組み自然に湾を形成しており船を泊めやすかったため、年貢積み出し港としての機能を果たすようになったのが尾道です。その後は、年貢だけでなく様々な商品も輸送するようになり、ますます港町・尾道は発展することとなりました。（『尾道の歴史と遺跡 中世編 -』参照）

江戸時代にはいると、港町としてさらに重要視されるようになります。その要因は「北前船」にあります。



浄土寺奉納絵馬（浄土寺所蔵）



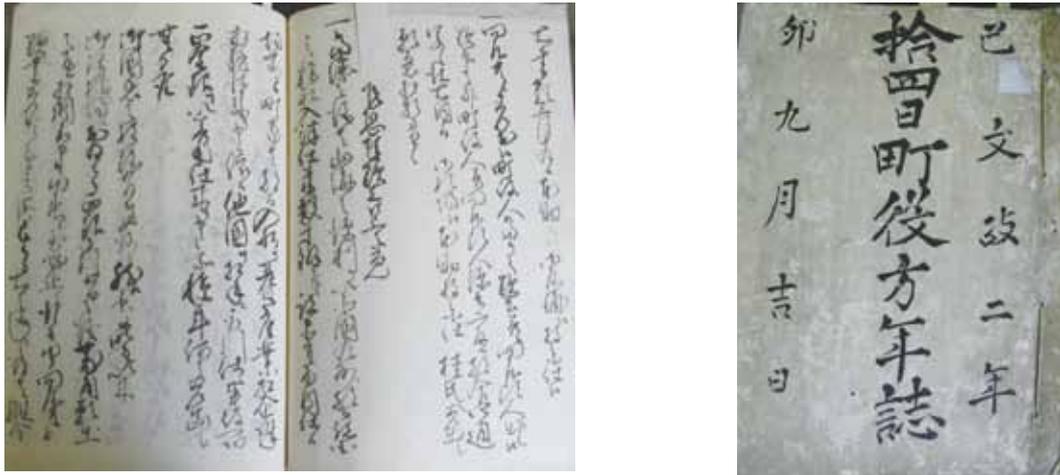
奉納絵馬（尾道市教育委員会所蔵）

「北前船」は、東北や蝦夷（北海道）の米や産品を積み込み、日本海側を進んで下関を廻り、瀬戸内海を通過して大坂へと向かう船のことです。北前船が通る航路のことを「西廻り航路」と言い、幕府が寛文12年（1672）に河村瑞賢という人に命じて開発させた新たなこの航路は、その後多くの船が利用するところとなりました。この船は、港に寄る度に現地の商人や、同じように船でやってきた商人たちと、積んでいる商品の取り引きをしたり、新たにその土地の品物を積んで商売をしながら航海をしていました。これにより、日本の沿岸部の各地に、人や物が集まり新たな港町がたくさん出現し、北前船が寄航するようになりました。

西廻り航路が開発される以前から、商人を始め多くの人に住んでいた尾道も、西廻り航路上の重要な港町のひとつであり、各地から毎日のように多くの船が出入りしていました。その様子は古文書にも書かれています。

「当湊の儀は^①山海の便利をもって^②北国九州すべての諸国の旅船入津つかまつり米穀干鰯ならびに諸品とも商内つかまつり候場所にて^③町家はすべて入船を■産業相企て永年相続つかまつり来り申し」

(『尾道市史 下巻』489頁「乍恐奉嘆上口上之覚」)



拾四日町役方年誌（広島県立文書館所蔵）

ここには、①尾道は山にも海にも通じた便利な場所であり、②そのために東北方面や九州など日本各地から、米や干鰯（ほしか）などさまざまな商品を積んだ船がやって来る場所であるとされています。船で輸送された荷物は海を通じて他国に運ばれるとともに、石見国につながる銀山街道を通じて内陸にも運んでいくことができ、多方面に移出できる地形を持っていました。そして③この町の住人は、各地からやって来た船人を相手にした商売を長年続けてきた、と記されています。

②からは、北前船が主に運んでいたのはお米や豆類などの穀物類である「米穀」、畑の肥料として使用した干鰯を積み込んでいたことが分かります。ここにはありませんが、その他にも蝦夷で採れた昆布や干あわびといった海産物なども積まれていました。これらの商品を積んだ船は尾道の港に着くと、浜辺で働く「中背（なかせ）」と呼ばれる人たちによって荷物が積み下ろされ、海岸沿いに建てられた倉庫に運び込まれます。そして、各荷物を運んできた船員と尾道の問屋商人の間で交渉が行われ、問屋に売り渡された後、尾道内外へ売買されていたのです。

このように、各地の商品が集まり、また各地へと運ばれていくため、尾道は「中継交易地」、つまり商品取引を通じて他の町と町をつなぐ重要な商業都市とし

て栄えました。日々大勢の人々が入り出りをしているとそれだけ様々な情報も入ってきます。各地からやって来た商人たちはここで互いに情報交換をして、各地の商品相場を知るなどしていました。

尾道には問屋商人がたくさんいたのですが、当時は誰もがいつでも問屋になれるわけではなく、尾道町で何人と数が決まっておき、それ以外の人には問屋商人にはなれませんでした。そして多くの問屋商人たちは取り扱う商品や取引する相手が決まっておき、それぞれの商人の屋号（家の称号）には鯛屋、帯屋など取り扱う商品を屋号に持つ家、または竹原屋や三原屋、石見屋といった取引地の地名を屋号にした家がありました。

西国街道と銀山街道が交差し、海上交通においても重要な地域であったこの町には、陸路・海路を通じて日々多くの人が入り出していました。広島県立文書館所蔵の「青木茂旧蔵文書」には文化5年（1808）～文政13年（1830）に久保町に滞在していた人について書かれた文書があります。それによると、当時最も多く尾道に来たのは大坂の人でした。以下は、備中（岡山）、播磨（兵庫）、安芸（広島）と続きますが、中には長崎、越後（新潟）、飛騨（岐阜）、江戸などからも集まっていたことがわかります。こうした人たちは商人として商品を販売に来たわけですが、その商品も花かんざしや薬、めがね、書画、茶道具など実に多様でした。それだけではなく、芝居や浄瑠璃の一行、噺家といった芸能者や、医者や植木職人、庭師などの技術者もおり、物だけでなく他地域の文化も流れ込んできました（「広島県立文書館だより」No.35 森本幾子氏「近世尾道を訪れた商人たち」）。上方や江戸といった先進地から持ち込まれた文化は、尾道の人々によって新たな独自の文化として発展し根付いていくことになりました。

尾道の発展に伴い各地から多くの廻船が入ってくるようになるとそれだけ多くの商人が集まってきます。すると、これまで決められていた商売に関する規則を破る者が出現し、商人の間で争いが生じてきました。この状況を危ぶんだ藩は、元文5年（1740）に平山角左衛門を町奉行に据えて流通制度の改革に踏み切りました。例えば、商品ごとに扱う商人を決めそれ以上は増やさないようにしたり、取引の慣習を改めて文章化するなどして商売の乱れを正しました。その他にも、問屋役場というものを設置し、問屋・仲買・仲仕の仕事を明確に分けて管理・統制を行いました。尾道の商人ら自身も対策に乗り出し、円滑に取り引きができるように商品の代金を立て替えてくれる問屋座会所を設けました。これら2つの機関は設立以後、名称を変えながら、機能を多少変化させつつ、幕末まで尾道の流通には不可欠な機関として続いていました。

問屋座会所を設立するにあたり特に多額の出資をしたのが橋本氏です。橋本氏の出自は不明ですが、屋号を灰屋といい、橋本次郎右衛門を始めとして17

世紀半ばに活躍するようになった、尾道を代表する豪商です。3代目当主の次郎右衛門の時、別家して加登灰屋と名乗り、金融業を主に、質、塩田経営、酒造業で財を成し、本家である灰屋をしのぐまでに成長しました。問屋座会所への多額の出資をするだけの経済力から、町年寄も勤め社会的地位も高い人物でした。飢饉の時には町の人々に食料を提供したり、新たな仕事を作って職を与えるなどして、町を支える貴重な存在でした。



橋本家が再建に尽力した慈観寺本堂

このように北前船の就航により、①全国から商人を始めとした多くの人と物の流入をもたし、②商取引が盛んになり、問屋座会所の設立、規則の条文化など流通制度が整備され、③他地域の文化が入り込み、尾道独自の文化として新たに創出され根付くこととなりました。

○瀬戸田

瀬戸田港は、生口島の北西に位置している港です。生口島は、14世紀の半ば頃に小早川氏の支配下に組み込まれ、後に小早川家の庶子生口氏に譲り渡しています。港に適した瀬戸田浦を利用して、小早川氏は海上勢力を成長させ、後に浦氏、小泉氏、生口氏とともに小早川水軍を形成しました。小早川氏の成長要因は生口島が海上交通において便利な場所にあったからだけではなく、生口氏がその実力を認められ、生口船として室町幕府から物資輸送のため自由な航行を認可されていたこともその一つです。生口船とは京都にいる小早川氏が必要とする物資を運んでいた船で、米や豆、小麦などとともに、最も多く運んだのが周辺で生産されていた「備後塩」でした。当時の塩は大変貴重なもので高値で取り引きされていました。また、物資輸送に関して瀬戸田商人と連携したことも発展の要因の一つです。生口氏にとっては商人と連携することで物資調達が可能となり、商人にとっても生口氏の特権を利用して商売がしやすくなるというわけです。

生口島は、中世には北庄と南庄に二分されていましたが、17世紀の初めに

12の村と瀬戸田町が成立し、この頃から瀬戸田町がひとつの町として公認されました。当時の瀬戸田町は、北が円林寺、南はしおまち商店街からひとつ南の通り、東は向上寺のあたりまでで、現在と比べると少し狭い範囲でした。当初は竹下町から北ノ浜町までに町屋敷が立ち並んでいましたが、時が経つにつれ住民が増えると南北に拡大されていきました。

文政8年（1825）、安芸国の各村の人口や風土、名勝や特産物などを調査し編さんされた『芸藩通志』には、「生口島瀬戸田町」の住民は商業・漁業・塩業・舟運業などに携わっていると書かれています。この記述を手がかりに江戸時代における瀬戸田町の様子や人々の生活に迫ってみることとします。

瀬戸内海地域では昔は塩作りがとても盛んで、備後の沿岸や芸予間に位置する島嶼部で生産された塩は「備後塩」として全国的に名が知れ渡り、文政8年の調査では竹原の塩に次いで第2位の生産額を誇っていたといえます。今でも海岸沿いの町では塩をつくるための浜「塩田」の跡がのこっているところもあります。尾道でも橋本家や向島の富島家のように広い塩田を所有している豪商もいましたが、特に瀬戸田は盛んで、江戸時代に入っても瀬戸田に住んでいた人々の多くが製塩業に関わっていました。

たくさんの塩をとるためには、まず海水を引き込むための広大な塩田が必要でした。これを所有しているのが「塩田地主」と呼ばれる人たちで、瀬戸田には三原屋（堀内氏）や増屋（片山氏）などの豪商がおり、塩業でばく大な利益を得ました。海水を蒸発させるためには大きな釜や薪などが必要ですが、こうした製塩に使う道具を塩田地主が仕入れ、出来上がった塩は地主の手によって販売され、船で日本全国へ運ばれていきました。こうして大きく成長した豪商たちがその財力で瀬戸田の経済を動かし、流通機構を掌握していたのです。



堀内家住宅



旧黒田家住宅

この時利用したのが、西廻り航路でした。この航路の開発は航路沿いに位置する町や島嶼が新しい港町として発展し、船は風待ちや潮待ちのために寄航す

ることが格段に増えました。瀬戸田を出発した船もこうした港町に立ち寄って食料や燃料である薪を得たり、積んできた商品を他の船の商品と売買しながら目的地へと向かい、そして新たに各地の商品を積んで戻ってきました。

西廻り航路の発達により瀬戸田にも全国から船が寄航するようになると、これまで日常生活のために生産されてきた木綿や穀類、海産物などが商品として取引されるようになり、こうした商品を扱う商人が増加しました。また船員たちを相手にして船宿を始める者や船の補修などを行う職人などが、瀬戸田町周辺から町に移り住み、徐々に人口が増え、町として発展していきました。

主産業は製塩でしたが、漁業も行われており、『芸藩通志』の瀬戸田町の絵図には町の最北端に「北濱漁師町」とあります。

瀬戸田町は塩田地主をはじめ、住人の大半が浜子や廻船業者として製塩に携わることで生計を立てていました。また、海に囲まれた瀬戸田町の人々は海と切っても切れない縁にあり、塩業だけでなく漁業など海の恩恵を受けながら生活していました。ここには海を通じて周辺地域から人が集まり町を形成し、船により日本の各地とつながることで、より多くの人や物が集まり、散らばっていく、賑やかな町でありました。

○棕ノ浦

瀬戸内海を航行する際の通り道にある因島には、自然の地形を利用した「海城」が多く作られ、今でもその跡を見ることができます。いずれも、中世に瀬戸内海での海上交通を支配していた村上水軍の拠点として設けられたもので、因島が瀬戸内海を支配する上でいかに重要な場所に位置する島であったかを示しています。その因島の東側に位置しているのが棕ノ浦です。海に向かって突き出した鶴ヶ峰の頂上は見晴らしが良く東側からの敵陣が攻めて来ても見つけやすく、また南側の斜面はとても急で攻めにくいという特徴をもっていました。このため、当時この周辺を支配していた小早川氏の見張りの城「一ノ城」が設けられました。現在でも、山の斜面には敵の侵入を防ぐために作られた堀切が、城のふもとには日常生活を送っていた土居屋敷跡が残っていますし、また小早川氏の墓と考えられる五輪塔も残っており、当時の様子をうかがい知ることができます。（『尾道の歴史と遺跡－中世編－』参照）

このように海上交通において重要な位置にあった因島には、昔から多くの船が出入りしていたため船の扱いに慣れた人がたくさんいる場所であり、棕ノ浦も例外ではありませんでした。こうした基盤があったため、江戸時代に入っても船を通して発展していくことになります。

『芸藩通志』には、棕ノ浦は「民産舶運を主とし」と書かれています。つまり当地の主な産業は、船で各地の産物を運ぶ廻船業であったということです。

椋ノ浦の人たちが持っている船の数は35艘とあり、尾道の235艘、瀬戸田の124艘に比べると格段に少なく、隣の三庄村の76艘と比べても半分ほどしか持っていませんでした。しかし、船の大きさは尾道では170石以下（石…コク。重さの単位）、瀬戸田は600石以下と小中規模の船ばかりですが、一方の椋ノ浦は1500～1600石という大規模な船であったと記されています。これは当時の広島藩では最大規模の船でした。こうした大きな船は、享保年中（1716～1736）から藩の御城米を輸送し、文化文政期（1804～1830）以降は北国の領主米や商人荷物などを積んで、北陸から九州を経て、椋ノ浦で荷物を積み替えて、大坂や江戸まで運んでいました。そのほかにも、朝鮮人が来日の際には大坂から使節団を乗せるための船を出すなど藩の御用を務めていたといえます。

大きな港町であった場所には大きな常夜燈が残っていることが多々あります。椋ノ浦にも文化2年（1805）に造られた常夜燈があり、当時航海をする人々にとって港町の日印としての役割を果たしていました。



椋ノ浦常夜燈

椋ノ浦には文政8年当時、180戸、742人が住んでいたといえます。住人のほとんどが廻船業にたずさわっていたと言いますから、実際に船を所持して日本各地へ出向いていた人もいれば、船を所有している人に雇われる「水主（かこ）」として働く人もいました。大型船があった椋ノ浦ではそれだけ多くの水主を必要としていたため、周辺の村や向島などからも大勢の人がやって来て、隣の三庄村と水主の取り合いをするほどでした。

入船する船の船員を相手に商売する人もいました。例えば船員に食料などを売る人がいたり、宿を提供し、洗濯などの身の回りのお世話をする船宿を営んでいる者がいました。また船宿は宿としての役割だけでなく、宿泊した商人どうしの商品売買の場でもありました。他にも船の整備をする船大工もいましたが、大きな船を持っている人が多いわりには当地で作ることはなく、小型船を作ったり、あるいは修理を行うのみで、大型船は船作りで有名だった倉橋島で造船したものでした。

このように廻船業によって成り立っていた椋ノ浦ですが、嘉永年間（1814～1853）以降には思うように利益を上げることができず徐々に衰退していくことになりました。椋ノ浦では生活が成り立たないため、兵庫や神戸、大坂まで出向いて船乗りの紹介をしてもらい出稼ぎに出て行く者もいました。

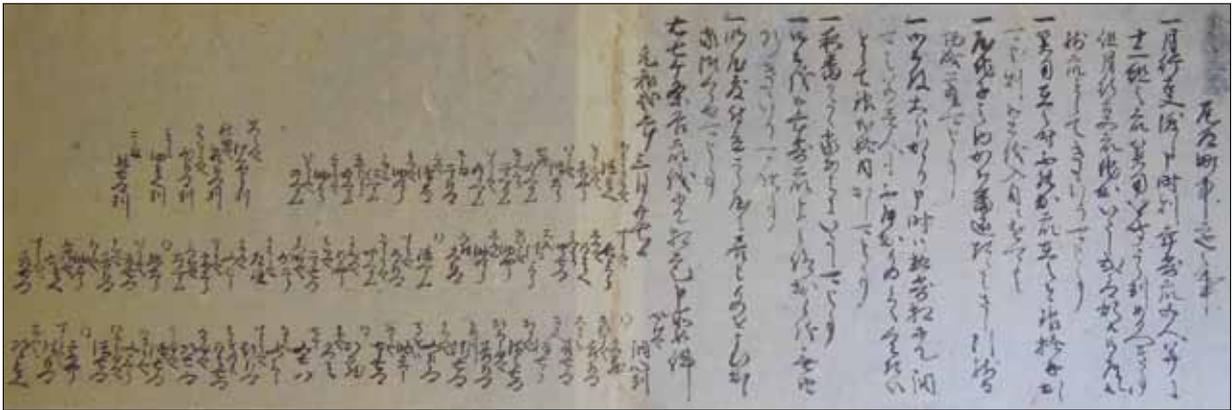
2 尾道町の政治体制

戦国時代、尾道は毛利氏の支配下にありましたが、その支配方法は、自分の家臣を尾道に配置したのではなく、地元の豪商と主従関係を結ぶことで間接的に行われました。なぜそのような方法をとったのでしょうか。それは新たに家臣を配置し、一から支配体制を作り上げるよりも、もとよりその地で活動していた商人と手を結ぶほうが容易に支配できたからです。しかし一番の理由は、当時から経済活動が盛んだったこの地を治めるためには、その中心であった商人たちと手を組むことで彼らが持っている流通ルートを掌握することもでき、軍事物資や、中国や朝鮮の高価な品物を入手しやすかったという利点がありました。

史料を見ると、毛利氏との結びつきが特に強かったと思われるのが大西屋（渋谷氏）・泉屋（葛西氏）・笠岡屋（小川氏）といった豪商です。彼らは、堺をはじめとして大坂商人や、また九州方面の廻船など、広い範囲の他国商人とつながりをもっていましたので、尾道には国内外の様々な物が入ってきていました。実際、尾道市街地を発掘すると多量の中国や朝鮮半島製の陶磁器や古銭が出土しています。毛利氏はこうした有力な商人たちに褒美を与えたり、また文禄4年（1595）には泉屋と笠岡屋を尾道を支配する役職に任じるなどして、経済活動が盛んなこの地を利用して、他の武将たちより戦略的に優位に立とうとしたのです。この流れをくみ、江戸時代にはいるとこうした武将たちの援護を受けながら成長した彼らが中心となって町の基礎を築いていくこととなります。

現在の「尾道市」は、北は御調町から南は瀬戸田町までの広範囲を市域としていますが、江戸時代は市街地のみを「尾道町」とよんでおり、「尾道」が指すのは今と比べると狭い範囲でした。更に土堂町・十四日町・久保町の3町に区分され、それぞれに配置された「年寄」の下に「組頭」「月行事」と呼ばれる年寄の補佐役をおいて、彼ら町役人が自治を行っていました。当初は渋谷氏・葛西氏・小川氏を初めとした5人の豪商が町年寄を担っていましたが、万治年間（1658～1660）には十四日町・久保町・土堂町の3町に1名ずつ年寄を置くようになりました。また17世紀末～18世紀初頭には、町民自身が発展に関わるよう「会所」とよばれる組織が確立し、町全体のつながりが一層強化さ

れました。



渋谷家文書 尾道町中之事（広島県立文書館所蔵）

町役人の仕事は非常にたくさんあります。当時は人の出入りを取り締まっていたので、今どこから来たどんな人が尾道に滞在しているかを把握するため、宿などから滞在者の名簿を出させ管理をしていました。尾道は、京都から九州へとつづく西国街道の途中にある町で、往来する旅人が休息する「宿場町」に指定されていました。そのため、幕府や他の藩の役人が通行する時は町全体で警備を行いましたし、宿泊場所の準備なども町役人の仕事のひとつでした。年寄を勤めたことがある小川氏の屋敷は、幕府の役人などが宿泊する陣屋に利用されていました。現在ではその様子を知ることはできませんが、一説には現在の商店街から沿岸部までの大規模なものであったとも言われています。その他にも、防火のための見回りや家屋敷の売買の立ち会いなど、町に関するあらゆることに関わっていました。そのためにも、経済力があり、顔が広く信頼のおける町の豪商が町役人を勤める必要があったのです。

町年寄・組頭ら町役人は町奉行所から任命され、またこれらの職務内容や町全体への規則も奉行所から下達（かたつ）されており、当時は町奉行所の監督の下、町役人や会所が上記のような仕事を実行して実質的に町政を運営していました。一方、商売の取り締りなど町人から年寄を通じて町奉行所へ願い出ることによって町人の意思が自治に反映されることもあり、決して町奉行所からの一方的な町政ではなかったことが分かります。

以上のように、18世紀頃に確立した自治体制は、町全体の監督者として町奉行所を配置して、町年寄や組頭の任を受けた町の豪商らが実務をこなしながら町運営を行っていました。しかしそこには、一部の限られた豪商だけではなく、町人らが会所・町役人を介して意志を伝えるシステムも整っており、尾道町に住まう人たち全員が町の発展を願い思いを巡らせ、それを実現する制度ができあがっていました。

Ⅱ 近世の町並みと絵図

1 発掘調査成果と絵図

市内で江戸時代の町並みの様子が分かるような場所はいくつかありますが、遺跡の調査を行っているのは、尾道遺跡のみです。ここでは、尾道遺跡の調査成果と町並みを描いている江戸時代の絵図を比較しながら、当時の様子を明らかにします。

江戸時代の尾道を描いている絵図として、安永3年(1774)の紙本著色尾道絵屏風(尾道市重要文化財 浄土寺所蔵)があります。これは向島側からみた尾道の様子を鮮明かつ詳細に描いており、西国街道(本通り)の両脇に商家や民家が密集して建ち並び、海岸を埋め立てている様子などがよく分かります。絵図には、多くの寺社が山裾に並び、町の西側には大きく尾道町奉行所と蔵所が描かれています。また、細かい小路も描かれており、当時と現在の町の地割りはほとんど変化していません。

こうした町の様子は、発掘調査の成果でも解明されつつあります。



尾道市重要文化財 紙本著色尾道絵屏風(浄土寺所蔵)

発掘調査では、現在の地面から少しずつ掘り下げていきます。そうすると、現代の建物、近代の建物跡がみられ、その下に江戸時代の地層が現れます。江戸時代の地層は地表面から約1m～2mの間の深さにあり、場所によって違いがみられます。

地層からは、建物の痕跡である柱穴や礎石、貯蔵穴、石組遺構、溝跡などが多数発見されます。それらを絵図の場所と比較することで、建物が建っていた根拠となります。このように発掘調査だけでなく、絵図などの資料と比較することで、町並みの復元の有力な情報を得ることができます。

では、当時の建物はどのようなものだったのでしょうか。発掘調査と絵図を比較しながら考えてみたいと思います。

発掘調査では、礎石建物が発見されています。柱は無くなっていますが、礎石はそのままの状態に残っているため、建物の大きさや構造が分かります。他に漆喰で壁を塗り固めた穴や木の板をはめ込んでいる穴が多数見つかっています。これらは、貯蔵用であったり、水瓶として使用されていたと考えられます。こうした建物遺構から推測できる建物は、柱を礎石の上にて、中には貯蔵穴や石組がある木造建物であり、絵図からは、屋根が萱葺き（かやぶき）あるいは瓦葺きであることがうかがえます。また、江戸時代の商家は、間口が狭く、奥行きが広い敷地であり、塀に囲まれていたようです。塀の基礎にあたる石組が発見されています。



礎石



尾道遺跡土層断面



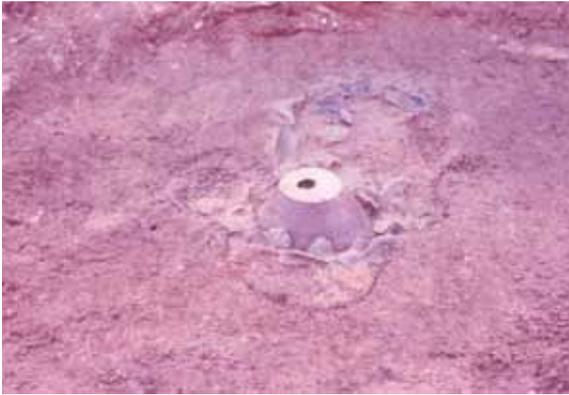
漆喰の土坑



木板がはめ込まれた土坑

また、一般的な商家の他に、庭園付きの邸宅跡も見つかっています。写真は庭園にあった水琴窟です。丹波焼の甕（かめ）の底に穴を開け、逆さにしています。ここに水を落とすことで音が鳴るしかけになっています。こうした風流なしかけがある庭園があったことが分かります。この場所を文政4年の『尾道町絵図』と比較すると、「宇津戸屋の庭」という記載があり、この水琴窟が商

家の庭にあったものであると推測できます。

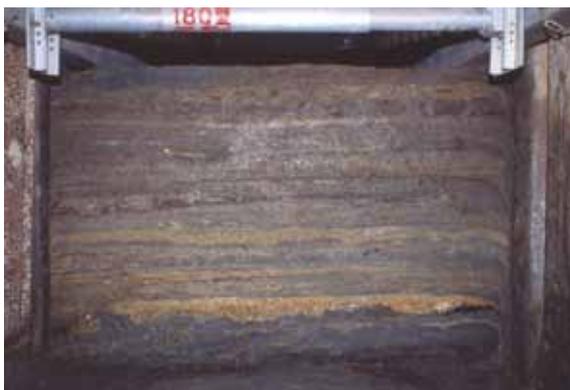


水琴窟



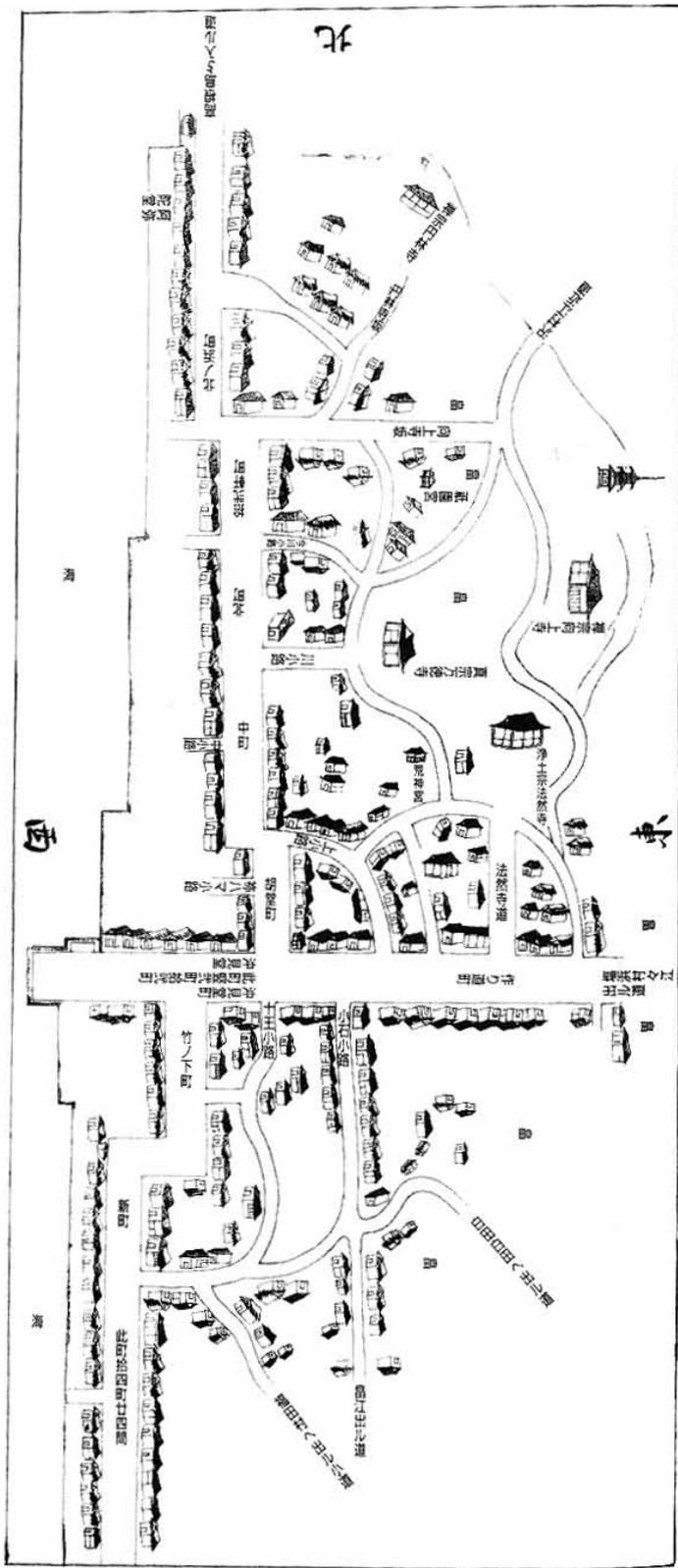
尾道町絵図抜粋

これらの絵図には、建物だけでなく、道も描かれています。現在の本通り商店街は、江戸時代には西国街道として人々の往来があり、この道を中心にして町が形成されたとも言えます。この西国街道を発掘調査した際には、何層にもわたって平らに整地された地層が見つかりました。この層は室町時代の頃から連続して続いており、江戸時代以前に作られた道を西国街道として利用していることが分かりました。この西国街道沿いには、尾道町奉行所や本陣(笠岡屋)、脇本陣、橋本家などの豪商の商家が軒を連ね、宿場町としての機能を果たしていました。街道からは、細い小路がいくつも派生し、あるいは、斜面地の寺社へ続く参道が延びていました。こうした町並みは、港町だけでなく、宿場町として発展した尾道の姿であるといえます。



西国街道の土層断面

尾道の他に、瀬戸田も大きな港町として発展しています。この時代において瀬戸田は、北前船の寄港地となり、製塩業の発展と合わせて、その塩を大坂や蝦夷地(北海道)方面に移出し、一方で寄港地の産物等が運ばれ、向上寺の麓に位置する瀬戸田港周辺の街もより一層発展しました。特に、海運業や瀬戸田



正徳年間の瀬戸田町市街図「芸備緒郡駅所市町絵図」



「しおまち商店街」にある「汐まち亭」元特定郵便局であった旧家を公開。



「しおまち商店街」の軸線上の西には常夜燈が位置する。



古い民家が立ち並ぶ小道が縦横に通じ、生活を支えている。

町人による塩田の経営と製塩業の発展は、近世末から近代にかけての街の拡大につながり、民家や商家、問屋等が建てられ、現在の街並みの基礎を形づくっています。

そうした中、町割と小路も発達します。江戸時代前期には、作道町・沖見道町の中央通りを軸に、南海岸沿いの竹ノ下町・新町など合せて9町が成立し、小路は、衾ハマ小路、中小路、向上寺坂、上小路など12の小路が縦横に走ってつくられました。

瀬戸田では、まだ港町の発掘調査が行われていませんが、今後、調査により、港町の形成過程が解明されることが期待されます。

2 港の埋立

このように尾道や瀬戸田は、中世から瀬戸内海交易の中継地として発展し、江戸時代においても有数の港町でした。さらに寛文12年（1672）に河村瑞賢により西廻り航路が開発され、北前船が寄港するようになると、さらなる飛躍をとげています。そうすると、港湾設備の拡大が要求されるようになり、元禄年間から継続的に港の埋立が行われます。

尾道では、元禄2年（1689）に薬師堂浜の西側を、元禄3年（1690）にさらに西の荒神堂浜を、元禄10年（1697）に土堂浜を埋め立てています。この埋立は商人たちの手によるもので、増大する船舶の出入りに応じる形となりました。

この後、さらなる港の活性化に伴い、船の繫留地と荷揚場が必要となり、住吉浜の築造が急務となりました。そこで、広島藩は、直接工事を計画し、元文5年（1740）尾道町奉行に平山角左衛門が任命されます。平山角左衛門は、翌年工事に着手し、住吉浜を築造します。そして、完成した後は、商人たちの信仰厚い海上守護神であり、浄土寺境内にあった住吉神社をこの埋立地に安置しています。この住吉神社に奉納するお祭りとして、毎年「尾道みなと祭」が開催され、平山角左衛門の功績を称えています。



住吉神社



住吉神社注連柱

このように少しずつ埋め立てられ、港が整備されていきますが、港の機能として、薬師堂浜より西側が主に使用されてきたのに対し、東側は埋め立てられているものの、長い間畑として使用されていたようです。記録によると、元禄年間から少しずつ埋め立てられ、天明元年（1781）から寛政3年（1791）で建物も建てられています。多くは加登灰屋橋本家の所有地として、弘化4年（1847）の尾道町惣図にも描かれており、現在の久保新開は、灰屋新田と呼ばれ、橋本家が管理していました。



橋本家文書 尾道町惣図（広島県立文書館所蔵）

こうした港の埋立と整備により、港町尾道は、北前船も寄港する中継地として、周辺地域の物資の集積地として繁栄し、瀬戸内海でも指折りの港湾都市となりました。

3 町並みと小路

尾道の特徴のひとつは細い路地がたくさんあることです。この細い路地の先に見える海、あるいは山の斜面に点在するお寺を写真に納めている観光客をよ

く見かけますし、最近では料理店や雑貨屋などのお店も増え、吸い込まれるようにして入り込んでしまう道です。こうした細い路地のことを「小路（しょうじ・こうじ）」と言います。全てではありませんが名前が付けられた小路もあり、場所によっては小路名が掘り込まれた石柱が立っていることもあります。では、これらの小路はいつ頃、どのようにしてできたのでしょうか。小路を手がかりに、尾道の町並みの形成過程を探っていきます。

先に紹介した江戸時代に作られた町絵図と現在の町並みを照らし合わせてみると、この商店街通りは近世の西国街道にあたります。西国街道とは京都から九州を結ぶ道のこと、幕府の役人や旅人が日々行き来しており、この道は今も昔もメインストリートだったのです（西国街道については後述）。当時もこの通りに面して多くの屋敷が建ち並び、往来する人々を対象に商いをする店、広島藩の役人が詰める町奉行所や幕府の役人の宿であった陣屋などの公的な施設などが集まり、尾道町の中心地でありました。

寺の町として有名な尾道は、昔から北の山手には寺社が点在していましたし、南は海に面していたために廻船の出入が多く商品取引の場となりました。山と海の間位置するこのメインストリートからは、山側へ参詣に行く道と、海側の商業地に行く道が自然に出来上がりました。これが小路です。小路はいわば、寺社と人、海と人をつなぐ道だったのです。

小路名が確認できる最も古いものは、長江口にある叶小路と胡小路で、江戸時代に埋め立てをする以前はこのあたりまで海岸線があり、両小路は船から荷揚げされた荷物を運ぶ道として利用され、また定期的に市がたっていたともいわれています。

江戸時代に入り埋め立てが進み海側に土地が拡大すると、西国街道を中心に南北にいくつもの小路が出来上がり、それぞれに名前が付けられました。現在では無くなった名前や、区画整理などで小路自体が無くなったものもありますが、消えてしまった小路も昔に作られた町絵図に書き残され、当時の風景を今に伝えてくれています。この本の最後のページに小路の位置や名前の由来を紹介していますので、ご参照ください。



築地小路

Ⅲ 港町の交易と文化

1 尾道遺跡から出土した陶磁器

尾道遺跡からは、江戸時代に作られ使用されていた茶碗や皿等、土師質土器（はじしつどき）、国産陶器、外国製陶磁器等が大量に出土しています。これらは、港町に住んでいた人々が使用していた生活雑器や商品として販売していたものまで様々な種類の土器があります。

土師質土器は、素焼きの土器で、「かわらけ」とも呼ばれます。中世では、生活の主要な道具として使用され、大量に出土しています。釉薬がかかっていないため、比較的もろい反面、大量生産が可能な土器です。江戸時代以前には皿、碗、鍋などの器種がありましたが、江戸時代になると硬質で使いやすい陶磁器が主流となり、土師質土器では、灯明皿（とうみょうざら）や鍋などがみられるのみとなりました。

国産陶器は、瀬戸焼や備前焼、丹波焼、唐津焼など日本各地の窯で焼かれた陶器が出土しています。特に備前焼播鉢（びぜんやきすりばち）、茶入、丹波焼甕、唐津焼碗、皿は日常使用される頻度も高いようで、多く出土しています。

瀬戸焼は、現在の愛知県瀬戸市周辺で焼かれていた陶器です。瀬戸焼は日本六古窯の一つとして、鎌倉時代頃から全国に先駆けて陶器の生産が行われ、全国に流通します。尾道でも尾道遺跡などで多く出土しており、室町時代以降交易品や生活雑器として使用されていたようです。それは、江戸時代に入っても同様で、瀬戸焼天目茶碗（せとやきてんもくちゃわん）や皿などが出土しています。



瀬戸焼天目茶碗

備前焼は、現在の岡山県備前市周辺で焼かれた陶器です。瀬戸焼と同様に日本六古窯の一つとして鎌倉時代頃から生産が行われ、全国に流通しています。備前焼は、陶器を焼く際の酸化焰焼成（さんかえんしょうせい）による茶褐色

に特徴があり、非常に重厚感があり頑丈です。尾道遺跡では、中世段階から壺、播鉢、茶入など多数出土しており、また、高さ1 m以上の大甕も多く出土しています。

江戸時代には、播鉢と茶入が多く出土していて、日用品として使用されていたことがうかがえます。中世では、播鉢は備前焼や東播磨系、瓦質土器のものが出土していますが、江戸時代になると、備前焼のみとなり、備前焼播鉢が大量に流通していたことが分かります。



備前焼播鉢



備前焼茶入

丹波焼は現在の兵庫県篠山市周辺で焼かれた陶器です。鎌倉時代頃から生産が始まり、壺や甕などの大型品が多いのが特徴です。また、窯で焼く際に薪の灰がかかり、「灰被り」と呼ばれる独特の模様と色合いが美しく、西日本を中心に広く流通しました。尾道遺跡では、甕が出土していますが、いくつかの甕にの底に穴が開いています。これは、第Ⅱ章でご紹介した水琴窟に利用されていたものです。通常、甕として使用する以外にも、こうした風流な使い道を考え、当時の人々は再利用していたようです。



丹波焼甕

唐津焼は、現在の佐賀県東部と長崎県北部周辺で焼かれていた陶器です。江戸時代に入り、生産が始まり、その素朴で侘び寂びのある形と色合いから茶器としても使用されていました。「一楽二萩三唐津」とは、茶器としての格付け

を示していて、楽焼や萩焼とともに、唐津焼も珍重されていました。

日常品としても広く流通し、尾道遺跡でも最も多く出土しています。皿、碗、坏などが多く、日常品としても味のある陶器を使用していたようです。

唐津焼は、江戸時代に広く流通するものの、その後、伊万里焼といった肥前系陶磁器が流通し始めると、日常雑器としての位置を奪われ、衰退していきます。尾道遺跡でも、唐津焼の他に大量に肥前系陶磁器が出土していて、大量生産されていたことが分かります。



唐津焼皿・碗

肥前系陶磁器は、一般に伊万里焼や有田焼と呼ばれる国産の陶磁器です。全体としては、伊万里焼と呼ばれ、肥前国（現在の佐賀県、長崎県）で焼かれていた国産の磁器です。江戸時代に入り、生産が始まり、絵付けを行う色絵磁器が生産されると、その美しさから瞬く間に全国に広まり、交易品として、日常品として利用されています。さらには、海外にも輸出するようになり、国産の磁器として、高く価値付けされます。

尾道遺跡でも多数出土していて、皿、大皿、碗、坏、壺、小瓶、鉢などがあります。赤絵や青絵が美しく描かれた品々であり、交易品として販売されていたり、日常的に使用されていたと考えられます。また、中世に中国等から輸入していた陶磁器に似た磁器もあり、中国や朝鮮半島からの技術も取り入れた生

産方法であったようです。



肥前系陶磁器皿・碗

このように江戸時代には、それ以前と異なり、国産の陶磁器が主流となり、海外からの輸入陶磁器は減少します。それは、各地の大名が陶磁器生産に力を入れ、名産品にしようと奨励していたことが大きく、それが、流通拠点である尾道にも影響しています。

さらにこうした陶磁器の他にも、様々な鉄製品、椀や皿、杓文字、櫛、膳、下駄といった木製品、砥石などの石製品も数多く出土しており、そうした製品も流通していました。

こうした品々は、港町尾道に限らず、他の地域でも同様に流通しており、今後の発掘調査により、各地域で江戸時代の品々が出土すると考えられます。そして、そうした調査成果を比較して、江戸時代の交易や流通を探ることができると期待されます。

2 豪商と茶園文化

江戸時代には、商工業、金融業等の発展により、数多くの豪商が生まれました。今までにも、触れてきましたが、尾道の橋本家、瀬戸田の堀内家などの豪商が町の発展に大きく寄与し、現在でもその名残があります。

表 江戸時代の代表的な豪商

屋号	氏名	生業	参考
油屋	亀山	質屋・両替商、塩田開発・土地経営	夢硯樓嘉樹堂
泉屋	葛西	海運・造酒・質商・鉄商	加島園
鯛屋	勝島	肥料問屋	此君亭
魚屋		塩田・製塩業	
大鍛冶屋	坂井	鍛冶屋	
大紺屋		造酒業（出雲藩御用商人）	
大西屋	渋谷	海運	
笠岡屋	小川	海運（尾道本陣）	
加度灰屋	橋本吉兵衛	質屋・両替商、塩田開発・土地経営	爽籟軒
金屋	栗田	造酒業	
栗原屋		塩田・製塩業	
車屋		造酒業	
小物屋		質屋	
金光屋	岡田	造酒業	
住屋	島居	薬屋、造酒業	柳陰亭
竹原屋	高橋	造酒業、鍛冶屋、質屋	
灰屋	橋本次郎衛門	肥料・米・綿卸問屋、造酒業、	
東屋	天野	質屋・両替商	
福岡屋	平田	木綿問屋	
三木屋		塩田・製塩業	
七拾屋	柳井	塩田・製塩業	
天満屋	富島	塩田・製塩業	向島 海物園
隅田屋	葛西		瀬戸田
増（升）屋	片山	塩田・製塩業、造酒業、廻船業	瀬戸田 住江
本得	得能		瀬戸田
三原屋	堀内	塩田・製塩業、廻船業	瀬戸田
万治屋	黒田		瀬戸田

ここでいう豪商とは、様々な産業や不動産業、金融業などで富を得て、幅広く事業を行っていた商人のことを指します。尾道には、各地、各時代に巨万の富を得た豪商が存在して、町の発展に寄与していました。近世初期には、戦国武将の毛利氏の下で尾道の代官を兼ねていた大西屋（渋谷氏）、泉屋（葛西氏）、笠岡屋（小川氏）などの初期豪商が町をまとめていました。

現在では、初期豪商に関する遺跡は少ないですが、渋谷氏の墓は善勝寺にあり、小川氏の墓と小川道海の六十六廻国記念碑が正授院に残っています。また、本通り沿いの小川小路付近には、笠岡屋の広大な屋敷があったことが記録に残っています。寛永15年の「備後国御調郡尾道町屋敷御詰帳」には、奥行37間、間口7間とあり、その後西国街道の宿場町尾道の本陣として使用されていました。まさに尾道の中心に位置する屋敷であったわけです。現在では、その屋敷地を切り取ってつくられた小川小路に名前が残り、屋敷跡には基礎石と伝わる大きな花崗岩の石が残っています。



また、同じく泉屋（葛西氏）一族の屋敷地も水尾小路から薬師堂小路の間にあったようです。一族は今蔵分家を拝出しており、今蔵小路という小路名が残っています。泉屋一族の墓は西国寺にあり、特に初代泉屋一相は、西国寺の大檀那として記録に残っています。また、一族の葛西重政は、広島藩に献金していますが、それにより、藩主浅野公から加島を拝領しています。葛西から松本に姓を変え、加島を別荘、庭園として整備します。その様子は『加島記』などに



加島園全景図

記録があり、木を植え、美しい庭園をつくり、文人墨客を招いています。

こうした江戸時代初期から活躍した豪商たちの他にも、その後多くの豪商が生まれます。特に灰屋（橋本氏）は、その後分家し、江戸時代中期以降、尾道の豪商の中でも中心的な役割を果たすようになります。

特に分家した加登灰屋（橋本氏）は、塩田業、不動産業、金融業などで財をなし、第Ⅱ章でもご紹介した橋本新開の埋立、管理など、町の基礎をつくりました。邸宅は現在の長江公園付近の西国街道と出雲街道が交差する町の中心に位置していました。また、別荘として、当時の尾道町の東端、現在の防地口に爽籟軒を築きます。この爽籟軒には、優美な築山と池をもつ庭園（尾道市名勝）と京都山崎の国宝妙喜庵待庵の写しをもつ茶室「明喜庵」（尾道市重要文化財）を建て、多くの文人墨客が訪れます。



爽籟軒庭園



茶室明喜庵

江戸時代後期の当主橋本竹下の時代には、頼山陽、田能村竹田、本因坊秀策らが訪れ、交流の証として多くの書画などが残っています。また、天保5年（1834）に田能村竹田や亀山伯秀らが訪れた際に千光寺山に登り、詩を詠んで楽しみ、それを刻んだ石碑を建て、えい紅碑と名付けます。こうした豪商たちの別荘は、尾道では茶園（さえん）と呼ばれ、千光寺山斜面地や街中につくられ、多くの文人たちが訪れ交流する場所となりました。



えい紅碑

江戸時代初期に藩主浅野公とともに、御用商人である天満屋（富島氏）も広島入りし、藩命により延宝年間から元禄年間にかけて向島の富浜に広大な塩田

を完成させます。その後、富浜の西に位置する烏崎に庭園を設け、海物園と名付けています。庭園には茶室や山林、池など趣のあるものを置き、対岸の尾道や尾道水道などの景観とあいまって、素晴らしい庭園となりました。他の茶園同様に多くの文人も訪れ、安芸の宮島、前述の加島とともに広島藩中の三名園として知られました。特に伏見桃山城にあったと伝わる茶室露滴庵を藩主から拝領し、その後、文化11年（1814）に浄土寺に寄進しています。



尾道市史跡 海物園跡



重要文化財 茶室露滴庵

瀬戸田でも増屋（片山氏）は江戸時代初期から塩田業、造酒業、廻船業などを営み、現在の御幸町に邸宅を築いています。また、その隣に瀬戸田水道に臨んで別荘をたて、その後三原屋（堀内氏）の別荘となり、現在の住之江旅館となっています。

さて、これまでご紹介してきた茶園や別荘は、豪商が築いたものですが、これ以外にも茶園があります。それは、千光寺山東麓にあったと伝わる挹翠園跡です。現在、この周辺は、斜面地に和風住宅や洋風住宅が密集する地域であり、そういった住宅地内に庭園に関連すると考えられる遺構が散在しています。位置としても、尾道遺跡の北端、つまり港町尾道の北側にあり、眼下には、長江の街並みと出雲街道が通り、南には、尾道水道や向島が広がっていて、当時は山なみ、島なみが臨める絶景が広がっていたと考えられます。

挹翠園跡は、江戸時代中頃に御調郡の割庄屋熊谷幾右衛門によって造られた茶園です。（朝井 1977）。文化・文政期には、頼山陽などの文人墨客が訪れ、頼山陽の「遊挹翠園記」や平賀晋民の「挹翠園記」に庭園の様子が書かれています。この茶園には、梅林や竹林、松林、巨岩などがあり、茶園から望む景色は格別であったと述べられています。

現在の挹翠園跡は、宅地化により、その多くは失われていますが、宅地内に巨岩や竹林、築庭、井戸などの遺構を確認できます。そのため、茶園の範囲や茶室等の建築物の場所も現在のところ不明です。

このように、長らく幻の庭園として、その存在だけが確認されていましたが、平成23年1月から長江中町内会と尾道学研究会、尾道市教育委員会の三者協働でその実態を把握する調査を行うこととなりました。その契機となったのは、尾道学研究会が茶園文化発掘プロジェクトとして、市内に点在する茶園、庭園の調査を行ってきたことにあります。そこで、庭園内にあったと考えられる窯跡を確認することを目的とし、継続的に確認調査を実施しています。



挹翠園跡



水路跡

この挹翠園跡からは、大量の土器が採集されています。これらの土器は、まとまって発見されているため、庭園内で使用された、あるいは作られた物であると考えられます。

土器は素焼きのものや釉薬がかかったもの、さらには型、ハマ、フイゴの羽口など、窯に関係する道具類があります。種類として、坏、碗、小皿、鉢、瓶などがあり、坏や碗には桃の実や胡桃の実の形をしたり、底に絵が描かれたものもあるなど趣のあるものが多くみられます。

これらは、煎茶の茶器として作られ、使用されていたと考えています。現在の煎茶で使用される小さな坏や湯冷ましの碗など、共通する部分も多くみられ、挹翠園において、そうした煎茶が行われていたのではないのでしょうか。



坏



碗



型



坏

また、型などの窯や製作に関する道具類も見つかっていることから、庭園内で窯で土器が焼かれていたと考えられます。同じ種類の土器でも素焼きと釉薬がかかったものがあることから、そうした製作工程も分かりますし、土器と同じ形、文様をつけた型も見つかっていることから、そうした型に粘土を押し付け、文様をつけた後に成形し、窯で焼いていたようです。

これは、お茶を楽しむとともに、そうした風雅な茶器を作ることも文人たちの楽しみであったのでしょう。尾道に茶園はたくさんありますが、こうした実際に使用していたと考えられる茶器が発見されている事例はなく、尾道の貴重な文化財であるといえます。



瓶



坏

このように、豪商たちは、ただ、財を築くだけでなく、その町の運営や形成に深く関わり、現在の町の基礎を作りました。また、茶園を設け、文人墨客を招き、尾道に新しい文化を取り入れました。風雅な茶園文化は尾道に深く根付き、明治・大正時代になっても尾道の斜面地などに和洋折衷住宅が建ち並び、別荘として利用されています。現在の尾道の町並みは、こうした茶園文化の影響を強く受けた歴史を持っています。

IV 西国街道と銀山街道

尾道は、嘉応元年（1169）に備後大田庄の船津倉敷地に指定され、年貢米積み出し港として発展しました。以来、遣明貿易船や対外交易船の寄港地となるなど、中世を通じて港町としての繁栄を遂げてきました。そして江戸時代になり西廻り航路が整備され、北前船が寄港するようになると、尾道は瀬戸内海屈指の港町としてよりいっそう繁栄しました。一方で陸路の整備も進み、それまで内陸部を通過していた古代山陽道が、海岸の埋め立て等によって再整備され、近世山陽道（以下、「西国街道」という。）として尾道の沿岸を通るようになりました。尾道は西国街道の公式の宿駅に指定され、宿場町としても大いに賑わいました。また、同じ時期に石見銀山からの銀の輸送に使用された銀山街道が尾道まで整備され、これによって尾道を結節点として東西に西国街道が、南北に銀山街道が通ることとなり、尾道は街道が交差するまちとして、近世の陸上交通において重要な役割を果たしました。

この章では、こうした2つの街道の歴史を、現在に残る街道沿いの遺構などからたどり、陸上交通の要衝として栄えた近世尾道の姿をご紹介します。

1 西国街道

■古代山陽道

古代律令制国家における五畿七道の一つである山陽道は、播磨国（現在の兵庫県南西部）から長門国（山口県西部）を結ぶ道で、尾道市においては現在の御調町を通過していました。七道は「大路」・「中路」・「小路」の三つの等級に分けられましたが、その中で「大路」に指定されたのは山陽道のみでした。山陽道が「大路」として国家から重要視されたのは、山陽道が政治の中心地である畿内と外交の窓口であった大宰府（福岡県太宰府市）を結ぶ唯一の陸路であり、中国大陸や朝鮮半島との外交によって常に新しい文化や技術を取り入れようとしていた当時の国家にとって、最も重要な交通路であると認識されたためでした。こうして古代山陽道は日本と東アジアとの相互交流において、瀬戸内海航路とともに中世まで大きな役割を果たしてきました。

■西国街道（近世山陽道）

江戸時代に入ると、幕府は江戸を起点とした五街道（東海道・中山道・日光街道・甲州街道・奥州街道）を設定します。これは江戸を中心とした交通網を

整備することで、中央に権力を集中させ、支配体制を維持しようとする江戸幕府の重要な政治政策の一つでした。

五街道からは、枝分かれして各地へ通ずる脇街道が設定されました。山陽道は京都から下関へ至る道としてその脇街道に指定され、かつての山沿いの道から、尾道をはじめとした瀬戸内海沿岸部の都市の発達にともなって一部を海沿いの道に変更し、再整備されました。こうして「西国街道」と呼ばれる近世の山陽道が新たに確立したのです。西国街道は、中央と対外交流の窓口である長崎（長崎県長崎市）を結ぶ陸路として脇街道の中でも重要な位置を占め、また参勤交代の大名や幕府役人の往来、書状や荷物の通送などの交通路としても重要な役割を果たしました。尾道においての西国街道は、福山藩領であった現在の高須町から関所の防地峠を越えて広島藩領に入り、本陣笠岡屋や奉行所であった尾道本通りを進み、栗原、吉和を経て三原へ抜けるルートが西国街道として整備されていました。

尾道本通りからは、平成14・15年（2002・2003）の尾道遺跡の発掘調査によって、何層にも積み重なった整地層が見つかっており、14世紀の土器なども出土していることから、この道は中世にはすでに道路として成立していたことがうかがえます。本通りは西国街道として利用される以前の、少なくとも16世紀前半には港町尾道の主要な道として存在していたと考えられます。

■宿場町 尾道

街道沿いには往来人の宿泊や人馬の継ぎ立て、物資や書状の通送などのため、ほぼ一定間隔で宿駅が設けられました。尾道も瀬戸内の主要港として発展したことにより、寛永10年（1633）の幕府巡検使のときに公式の宿駅に指定されています。街道は道路幅が統一され、里程を知るための目標となる一里塚や松並木が整備されました。また街道沿いにはたくさんの商家や民家が建ち並び、大名の宿泊所であった本陣や、町を取り締まる奉行所などがありました。

先にご紹介した絵図からは、西国街道が現在の本通りとほぼ重なることが分かります。また街道沿いには商家や民家が密集していること、本通り西端付近には一里塚と松並木があったことなどが分かり、尾道が奉行所や本陣が整備された、大規模な宿場町であったことがうかがえます。江戸時代中期以降は公用の通行だけでなく、商品の輸送や一般の旅行者による通行も増え、日々多くの人が往来していました。



高須一里塚跡



関の地藏尊



高須辻堂

また、高須一里塚からほど近い場所に関の地藏尊があります。三重県鈴鹿郡関町の日本最古の地藏菩薩をもつ地藏院から分祀（ぶんし）したと伝えられ、咳の病にご利益があるといわれています。街道沿いには道標としてこうした信仰を兼ねたものもあり、旅人の安全な通行の手助けとなっていました。

また、高須には旅人の休憩場所として利用された辻堂も残っています。

・防地番所跡

江戸時代には、各藩の境界ごとに関所を設けて、旅人の取締りをしていました。関ヶ原の合戦以後、安芸・備後の領主であった福島正則が元和5年（1619）に改易されると、両国は広島藩と福山藩に分けられ、現尾道市の大半は広島藩に、山波・高須・西藤・浦崎・百島は福山藩に属することとなりました。そして広島藩は浅野氏が、福山藩は水野氏によって統治されました。藩境であった防地峠には関所が設けられ、現在でもその名残である道標が2基立っており、西側の道標には「従是西 芸州領」、東側には「従是東 福山領」と刻まれています。関所の建物であった番所も、広島藩の方はなくなっていますが、福山藩の番所は現在でも当時の姿のまま残されています。



防地番所跡

・正念寺

天正2年（1574）、覚阿弥陀仏の開基と伝える時宗の寺です。防地峠の関越えをする旅人にとって格好の休み場となっていました。境内にある「延命井」という井戸から湧き出る水は「延命の水」と呼ばれ、尾道の名水として現在も

市民に親しまれています。隣には「延命地蔵」（尾道市有形民俗文化財）を安置した地蔵堂があり、街道を歩き交う人々はここで足を休め、延命の水で湯茶の接待を受け、旅の疲れを癒したといえます。

・交通安全標識燈籠

現在尾道東高校に立つ燈籠で、頼山陽の筆で「往来安全」と刻まれています。これは天保年間に山陽と親交の深かった藪内流茶道の宗匠 内海自得斎が山陽に揮毫を依頼して建てたもので、日本最古の交通標識といわれています。当初は街道沿いの防地川付近にあったものを、現在の位置に移動させています。



正念寺



交通安全標識燈籠

・本陣 笠岡屋小川氏

多くの人々が往来する宿駅には、参勤交代の大名や、公家、幕府役人の宿泊場所となる本陣・脇本陣が設けられました。本陣・脇本陣には各地の年寄りや庄屋の居宅をあてることが多く、尾道では笠岡屋（小川氏）の屋敷が本陣に指定されました。笠岡屋は、文禄4年（1595）に尾道の代官に任ぜられ、その後代々町年寄をつとめていた由緒ある家柄で、戦国時代から近世初期にかけての尾道を代表する豪商でもありました。昭和57年（1982）の尾道遺跡の発掘調査では、本陣があったと考えられる場所から礎石や坑穴などの建築物遺構が確認されています。

・尾道奉行所（勤番所）

尾道奉行所は尾道町の中心として町政を取り仕切る、現在でいう市役所の役割を果たしていたところで、西国街道沿いである現在の本通りの西側に位置し、所在地と推定される場所には碑が建っています。奉行所による支配体制が始まったのは正徳5年（1715）で、尾道町の町政は広島藩から任命された町奉行を中心に、町の豪商である橋本氏や亀山氏らの年寄・庄屋などによって運営

されてきました。奉行所は年貢の取り立て、抜け荷の取り締まり、諸商売に関する注意、藩主や諸大名の対応、石見銀の運搬時の警備、宗門改めなど、多様な職掌を担っていましたが、実際にこれらの任務にあたったのは年寄や庄屋などの地位に就いた尾道の商人たちであり、奉行所は藩から派遣された監督者として尾道町に関わっていました。

当時の様子を描いた絵図からは「御屋敷」や「御蔵」などの奉行所関係の建物が建ち並んでいたことがうかがえます。

・ 爽籟軒庭園

街道は人や物資の移動だけでなく、人と文化の交流ももたらしました。

現在の久保二丁目に位置する爽籟軒庭園は、豪商、橋本吉兵衛（竹下・ちっか）が築庭した茶園です。橋本氏は、江戸時代に質屋経営や両替商などの金融業によって成長を遂げ、町年寄もつとめるなど、尾道の経済発展に大きく寄与した人物です。そして同時に文化の創始者でもあり、庭園に京都山崎にある千利休が建てた「妙喜庵待庵」の写しである「明喜庵」という茶室をつくり、頻繁に茶会を催すなどして尾道に茶の文化を浸透させました。

西国街道の整備は、頼山陽や菅茶山、田能村竹田、本因坊秀策といった多くの文人墨客の往来を促し、橋本氏はこの爽籟軒を拠点としてそうした人々と交わる事で、尾道の文化をさらに発展させていきました。



爽籟軒茶室 明喜庵

2 銀山街道（出雲街道）

石見銀山で産出された銀は、いったん大森（島根県太田市）の御銀蔵に貯蔵され、年1回、旧暦の10月下旬から11月初旬にかけて大坂の銀座へ運ばれ、そこから京都の銀座に送られて全国統一の貨幣である丁銀に鑄造されていました。

銀が運ばれたルートは、大森を起点として陸路にて南下し、中国山地の赤名峠を越え、三次、吉舎、甲山を経て尾道まで至る銀山街道が整備され、そこか

ら尾道で船に積み替えられ、瀬戸内海を渡って大坂へ運ばれるというものでした。大森から尾道までの距離は約130kmで、3泊4日の行程で運ばれていました。

この街道がいつ頃整備されたのかは定かではありませんが、初代の金銀山奉行・大久保長安が街道に必要な一里塚や天馬制度の創始者であり、街道の整備に熱心であったことや、土木技術に精通していたことなどを考えると、長安が奉行に就任した慶長6年（1601）頃から整備が始められ、西国街道と同時期の17世紀前半にはほぼ確立していたと考えられます。

尾道市内の銀山街道は、現在の御調町から南下して尾道に至るルートが街道として整備されています。銀の輸送隊が尾道に到着すると、運ばれてきた銀は本陣をつとめる笠岡屋に預けられました。銀は幕府の重要な財源であったため、その輸送には大名行列並みの厳重な警備体制が敷かれました。銀輸送の一行が通行する際は、運上奉行、町役人をはじめ商人たちは羽織袴で銀の到着を待つこと、料理の準備や宿への送り迎え、銀蔵での厳重な警備など、藩からの規則としてこと細かく対応が決められていました。また街道の清掃をするほか町中にも警備体制が敷かれるなど、銀輸送の受け入れは町をあげての大仕事となっていました。

街道沿いの遺構

出雲街道沿いには、現在も当時の古道や夜道の灯火のための常夜燈、休憩場所の辻堂や道標など、街道が通っていた当時の名残をとどめた遺構が多く遺されています。

■宇根の古道

街道は甲山から下って御調町に入ると、国道184号線の西側の、宇根の尾根道を行きます。この古道は、現在も街道として使用されていたそのままの形で残っています。



宇根の古道



古道の石敷き

■公文の常夜燈

宇根の古道を抜け公文へ入ると、耕地整理により移転していますが、常夜燈

が建っています。この辺りを街道が通っていたことを示す貴重な石造物です。

常夜燈は街道沿いの各地に配置され、夜道の安全確保のために一晩中火をともし、灯火の役割を持っていました。

■高尾の辻堂

御調町の町に近い高尾地区にある辻堂です。『芸藩通志』によると、辻堂は街道沿いにあり、現在地より約300メートルほど北寄りにありましたが、明治の初めに移されました。戦前までは藁葺き屋根でしたが、現在は木造瓦葺きになっています。2メートル四方の板床があり、堂内には地藏菩薩が祀られています。付近には「高尾の清水」として知られた名泉があり、旅人はここでのどを潤し、辻堂で休憩し、旅の疲れを癒したといわれます。



公文の常夜燈



高尾の辻堂

■金比羅大権現の常夜燈

高尾の辻堂から下って市^{いち}に入ると弘化4年(1847)建立の常夜燈があります。旅の安全の神様である「金毘羅大権現」の刻銘があり、かつて街道筋であったことを物語っています。



金比羅大権現の常夜燈

■幣高八幡神社

御調から尾道に入り、木ノ庄町木梨の出雲街道沿いに位置する神社で、文明年間(1469～1486)創建と伝わります。木ノ庄の鉦太鼓おどり(広島県無形民俗文化財)を奉納する神社として知られています。



幣高八幡神社 本殿



長江の出雲街道道標

■六本松の地藏尊

木ノ庄町からさらに下り栗原町向山の小高い丘の上にこの地藏堂が残されています。この堂の裏には六本松の名の由来となった松の枯れた株が残っており、旅人の憩いの場であったと思われます。

■長江の出雲街道石標

御調から南下してきた出雲街道は、現在の長江を通り御袖天満宮の参道と交わる場所で鉤状に折れ曲がり、西国街道と交差していました。この片隅に「左 いつも往来」「右 天満宮道」と刻まれた道標があります。道標は旅人の往来のため方向や距離などを書いて分岐点や交通の要所に建てた標をいいます。出雲街道の終着点であったこの一帯は商家が立ち並び、賑やかな町並みとなっていました。

近世における西国街道と出雲街道の2つの重要な街道の整備は、海上交通の寄港地であったことも重なり、尾道により多くの人や情報、物資や文化をもたらし、尾道の商業港としての地位をさらに向上させることとなりました。発掘調査によって市街地の地下からは当時の人や船によって運び込まれたと考えられる伊万里焼や唐津焼など日本製の陶磁器のほか、中国製の青磁・白磁器も大量に発見されており、陸路・海路の交通網の発達によって、当時の尾道町がいかに繁栄していたかをうかがうことができます。

V 近世の産業と石造美術

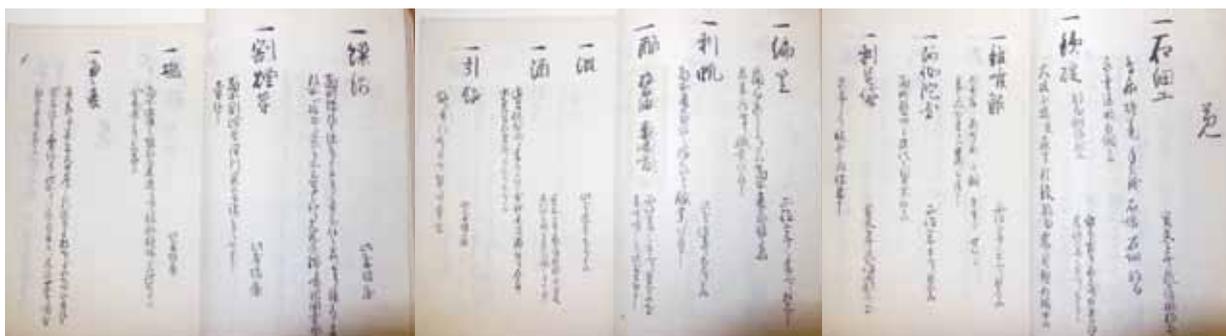
1 近世の産業

江戸時代の尾道は、港町として、宿場町として繁栄していましたが、様々な物が作られる産業の町としても大きな地位を占めていました。それらは、現在でも残っている重要な産業でもあり、北前船や街道により、全国で流通する名産品でもあったわけです。

第V章では、そうした尾道の名産品の数々をご紹介します。

江戸時代の尾道の産業といえば、製塩業、畳表、鉄産業、造酢業、造酒業、申柿、柿渋などが盛んでした。

特に塩と畳表は、尾道周辺が大生産地で、港に集約され、北前船や交易船により全国各地に運ばれていました。



文政 11 年 拾四日町役方年誌（広島県立文書館所蔵）

製塩業

古代、中世から尾道では塩作りが行われていましたが、入浜式塩田という新たな方法により、生産量も拡大し、各地に塩田が造られました。

藩	郡名	浜名	軒数	開発年代
広島藩	豊田	生口古浜	33	1670～1683
	御調	富浜古浜	11	1677
		栗原沖浜	4	1688
			肥浜	8
	豊田	生口新浜	7	1690～1696
	御調	富浜新浜	14	1691
	御調	天女浜	11	1692

	〃	吉 和 浜	21	1696～1715
	〃	津 部 田 浜	2	1697
	御 調	小 肥 浜	2	1730
福山藩	沼 隈	山 波	1	1698
	〃	浦 崎	2	1715
	〃	百 島	3	(文化～天保)

特に吉和浜や向島の富浜、生口島の生口浜は、大規模な塩田が整備され、その塩田を運営していた灰屋橋本氏や天満屋富島氏、三原屋堀内氏などの豪商がうまれます。そうした広大な塩田跡地は、現在では、宅地や造船所などの工場、メガソーラーの設置場所など、様々な用途に活用されています。



富浜塩田（昭和26年頃）



塩田跡地のメガソーラー

畳表

畳表は、原料として、良質の藁草（いぐさ）が必要です。その原産地は古くから沼隈半島であり、藁草の栽培から製織まで行われていました。尾道では、寛文4年（1664）に14カ村（栗原、吉和、美ノ郷、木ノ庄、原田など）が藁草の栽培で広島藩から指定を受け、織機の数をも170機として保護されています。



長江通りの町家



干浜の掟書

それにより、蘭草が広く栽培され、また港町尾道には、畳表の間屋が多くあり、貴重な交易品となっていました。

また、蘭草の加工品として、花莫蔭（はなござ）があります。花莫蔭は色をつけた蘭草により花の模様が織られた莫蔭で、現在でも各地で作られています。尾道では、前述の豪商泉屋が加島を広島藩から下賜され、ここで花莫蔭が生産されています。

さらに畳表の一つである「竜びん表」は、栗原町竹屋地区で全国唯一の産地として古くから作られてきました。竜びん表は、床の間の上敷きや茶室用の高級畳表として珍重され、現在でも取引されています。

こうした蘭草を原料とした産業は、藩の保護を受け、一大生産地として、流通拠点として尾道に集約され、全国各地に出されています。

鉄産業

尾道は中世には、中国山地の砂鉄が港町尾道から各地に運ばれていたこともあり、刀鍛冶が盛んでした。尾道の有名な刀匠として、「其阿弥」（ごあみ）と「辰房」（たつふさ、たつぼう）がおり、室町時代には多くの刀剣類が作られています。

その後、江戸時代になると、刀剣類から平和産業に移行し、鍛冶屋町に密集して鋤、鍬、鎌などの農具や碇、釘などの生産が行われています。特に碇は、尾道碇と呼称されるほど、堅牢で折れず曲がらず錆びないという特徴があり、全国的にみてもかなりの量が製造され、北前船には交易品の他に碇も積み込まれ、各地に運ばれています。

鍛冶屋町近くの良神社境内には、金山彦神社が祀られており、これは、昔鍛冶屋町にあり、鍛冶連中の信仰を集めていました。

造酢業・造酒業

尾道の酢は全国的にみても非常に古い歴史があります。伝承によれば、天正10年（1582）に灰屋橋本次郎右衛門が尾道で酢作りを始めたとされ、現在の尾道造酢の起源となっています。尾道酢には、北前船で運ばれていた秋田米が使用され、江戸時代中期には、灰屋次郎左衛門が広島藩の御用酢座に任命され、藩の御用品として納入されていました。

作られた酢は、北前船によって各地に運ばれ、現在でも尾道酢の徳利を北前船寄港地でみることができます。新潟県佐渡市宿根木は、北前船寄港地として有名ですが、地域の資料館には、ヲノミチと書かれた酢徳利が展示されています。こうした酢徳利の全国的な分布は、尾道酢の流通を探るうえで、重要なデータとなります。



佐渡市宿根木に残る酢瓶



備前焼の酢瓶

酢と同様に酒も米を原料としています。造酒業も尾道では盛んに行われていて、尾道酒は江戸時代には銘酒として取引されていたようです。豪商の中にも多角経営として、造酒業を行うものもあり、尾道のブランド品として扱われています。

串柿・柿渋

現在でも御調町では串柿が作られています。こうした柿の栽培と串柿、柿渋の製造は、江戸時代から行われていました。元文3年(1738)「菅村指出シ帳」によると、菅村(御調町菅)には柿の木が180本あり、既にかんりの柿生産が行われていました。その後、串柿は商品として有名になったようで、利益としてもかんりのものになっています。そうした伝統産業が、現在の御調町でも行われていて、柿を干す光景は、尾道の風物詩の一つとなっています。



御調の串柿

串柿で使用される柿とは別に、渋柿も大量に栽培されていました。御調町だけでなく、栗原や美ノ郷、さらには因島でも数百本の渋柿が栽培されていた記録があり、古くから渋柿からとれる柿渋の生産が行われていました。

柿渋は、織物や袋、染物、漁網用の糸の染め上げなど、広い用途で使用され

ています。特に網を柿渋で染めると乾燥が早く、丈夫になり、漁業も盛んであった尾道や周辺地域で多くの需要が生まれました。

こうして江戸時代に柿渋の生産地として、著名となり、特に因島は三大生産地の一つとして数えられています。

以上、ご紹介した尾道の産業、名産品は、江戸時代に書かれた亀山士綱『尾道志稿』などにも紹介されていて、全国的に有名であったものばかりです。中には尾道酢のように現在でも生産されているものもありますが、多くは江戸時代以降に衰退し、市内にその痕跡が残るものもあります。

そうした中で、特に数多くの痕跡が残っている産業として石細工があります。次に様々な石造美術を生み出した石細工をご紹介します。

2 尾道の石造美術

尾道は「石のまち」とも呼ばれます。市内の多くの山には、花崗岩の巨石が今も残り、古くから良質の花崗岩が産出されてきました。古代には、古墳などの墓石に、中世になると、寺社の建造物の礎石や五輪塔などに花崗岩が使用され、石造美術の基礎ができてきたといえます。

江戸時代に入ると、五輪塔などの他に鳥居や狛犬、常夜燈、注連柱など多様な種類の石造物が作られるようになり、また、それらを製作する石工と呼ばれる職人が多くみられるようになります。

ここでは、そうした尾道に住み、美術品ともいえる石造物に注目して、江戸時代の様々な石造物についてご紹介します。

鳥居

鳥居は、神社の入り口にあり、石造物の中でも非常に大きいものになります。市内で最も古い鳥居は、亀山八幡神社の参道にある一の鳥居です。万治2年



亀山八幡神社の鳥居



良神社の鳥居

(1659)の紀年銘があり、笠木の反りが美しく、貫にわずかに反りがみられる独特の形状をしています。また艮神社の鳥居も万治3年(1660)の銘があり、亀山八幡神社の鳥居と同様の形をしています。これらが、最も古く、鳥居の多くは江戸時代中期から後期にかけてのものが残っています。

石燈籠・常夜燈

燈籠は神社などにあり、灯りをつける石造の器具のことです。また、常夜燈は街道沿いや港町にあり、これも灯りをつけて目印や照明としたものです。

市内の寺社や旧街道沿い、港の海岸沿いに数多くみられ、江戸時代に建立したのものもあります。特に亀山八幡神社の軍配燈籠や巖島神社のかんざし燈籠は芸術性が高く、また、住吉神社の常夜燈は市内最大級のものです。



亀山八幡神社の軍配燈籠



かんざし燈籠



住吉神社の常夜燈

狛犬

狛犬は神社の拝殿前面の両脇や参道にあり、神社を守護するものです。市内にも数多くの狛犬があり、尾道石工の芸術性が際立っています。巖島神社の狛犬は市内最大級の尾道型狛犬で、文政4年(1821)と天保8年(1837)の尾道石工作です。また、山脇神社には珍しい狛猿もあります。



巖島神社の狛犬



山王神社の狛猿

その他

その他にも市内には、ご紹介できないほど数多くの石造物があります。浄泉寺の天邪鬼や御袖天満宮のさすり牛、持光寺の石の門、因島の白滝山（尾道市名勝）にある700体の石仏などです。こうした石造物のほとんどは、尾道石工が製作したものであり、尾道石工はその技術の高さから、周辺地域に限らず、北前船の寄港地である日本海側の港にも石造物が分布し、江戸時代の尾道石工の活動範囲や技術を探るうえで重要な資料となっています。



浄泉寺の天邪鬼



御袖天満宮のさすり牛



持光寺の石門



白滝山の石仏